

朝倉川（豊橋市）上流部ホタル護岸区の景観設計

豊橋技術科学大学 清川 美奈

豊橋技術科学大学 正会員 中村 俊六

1. はじめに

現在、水辺空間に対して豊かな自然と美しい景観が求められているが、その設計手法は必ずしも確立されていないように思われる。本研究では、設計手法を考察するためのケーススタディーとして、愛知県豊橋市を流れる朝倉川（流域面積約17km²；図-1）の上流部（内山川の合流点を中心とする、多米中町の松本橋から公園橋間での間、約200m）を対象として、

- ① ホタルの生息環境の復活（計画の中心課題）、
 - ② 水辺空間に、人々が安全で気軽に触れ合えるような親水性の向上、および、
 - ③ できるだけ多くの人々に好まれるような河川景観の創造、
- を目的とし、景観設計を試みた。

2. 条件の設定

それぞれの目的に対して、以下を必須条件と考えた。

1) 治水上の安全率確保

すでに改修された区間であることから、既存の横断面における計画洪水量に対する流積を確保すればよい。

2) ホタル生息条件

種々の文献調査等から①河床の活性化（餌としてのカワナ生息場の確保）、②日陰、③隠れ場所、が必須条件と思われる。

3) 親水性向上

魅力ある水辺と、水辺へのアプローチ確保。

4) 景観

主要な視点からの風景における「まとまりの中のきわだち」。

然石を用いた小落差の落差工を増設する。

2) 日陰と隠れ場所：左岸側の護岸（北向き）をほぼ直立させてその中にホタルブロックを埋め込み、湾曲部を増水時の水衝部として、平時のミオ筋を固定化する。

3) 魅力ある水辺とそこへのアプローチ：右岸側を緩傾斜化し、南向きの階段状護岸と散策路を付けることによって確保する。（付近住民へのインタビューから、主要な動線を設定した）

4) 景観：主要な視点を、松本橋上と多米公園出口に設定、「まとまりの中のきわだち」がある景観設計を心掛けた。

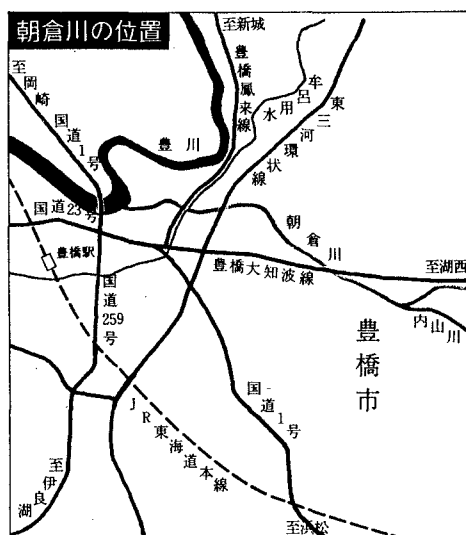


図-1 朝倉川

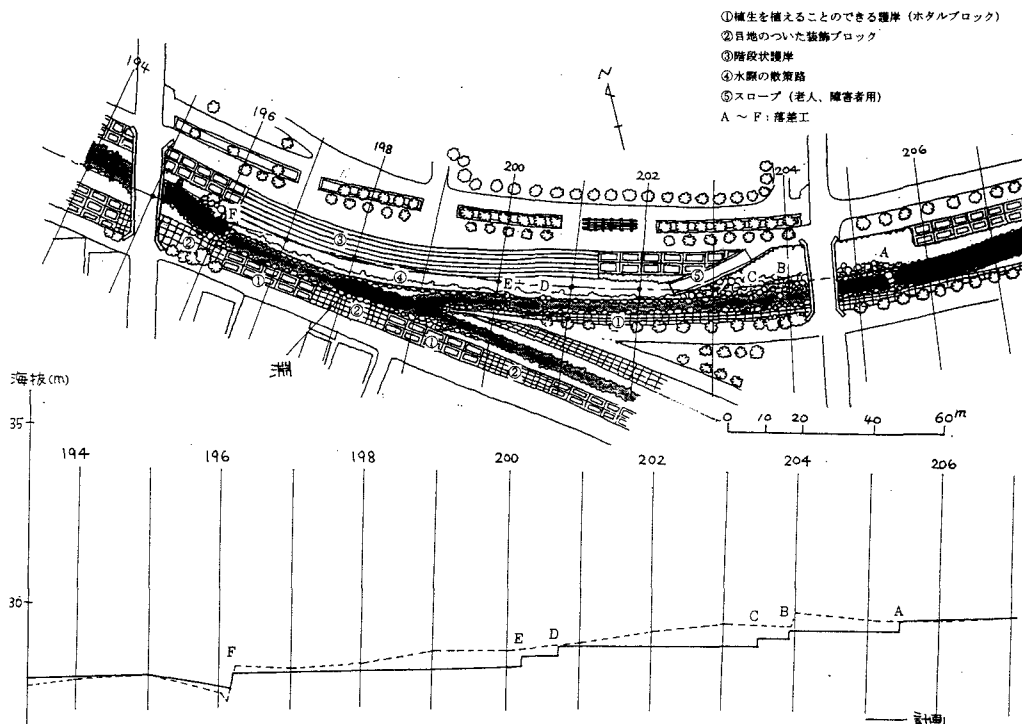
3. 条件確保のための具体策

上記の諸条件を満足させるための方策として以下を考えた。

1) 河床の活性化：増水の度に河床の砂利が洗われるような、活きた瀬を作る必要があり、このために、自

4. 試案

ひとつの試案を以下に示す。



5. 考察と結論

以上のケーススタディの結果、以下のように思われた。

- 1) 治水上の要請をはじめとする多くの条件から、景観の骨組みの大要は自ずから決まってしまう。
- 2) 落差工のように、本来は治水上の要請から設置される構造物を、生態系のための河床の活性化に活かすことが可能である。

- 3) 付近の住宅分布状況や、散策コース等からそれにマッチした親水護岸の位置も確定する。
- 4) 結局景観のポイントは、以上の条件で決まってくる多くのエレメントにいかにもまとまりを持たせ、その中に「きわだち」を与えるハイライトを設定するかである。（今回の場合、合流点直下の淵を一つのハイライトとしたが、その上（陸上部）にもハイライトが欲しかった。）